



一隅を照らそう
10月号

333号
毎月28日発行



花みずきの実

赤くなり始めました

春に ピンクや白の花を
咲かせる花みずき

今 その実が

葉も紅葉して美しく

花・実・葉と
季節ごとに楽しめる
花みずき

これから少しづつ
秋が深まって行きます (遊)

「アメリカが、くしゃみをすると、日本が風邪をひく」とよく言われてきました。

コロナ禍で世界最多の死者六十七万人という米国は、世界で最も医療費を国民が負担する国でもあります。また今米国は、白人労働階級でも「絶望死」が増え、学歴による寿命や生きがいの格差が増大し、この惨禍に深刻さを深めています。

フェイスブックやツイッター等のSNSが普及し、メディアの役割も打撃を受け、労働者の仕事に対する「誇り」が大きく削がれています。また「幸福追求」の内容が、余りにも個人主義的に捉えられるようになってしまった事への反動が「絶望死」の背景にあるとも指摘されていますと新聞にありました。(9/22朝日)

ともすれば私たちは毎日の生活の中で、個人が幸福であるように見えることが求められ、また周囲も「幸福そうだから」と、反応します。このことが実際と異なり、孤独感を深めてしまう結果となっていることは、ありがちなことです。

資本主義社会の頂点に立つ米国で、こうした「病い」を深めているということは、日本でもこうした個々の幸福追求の果てに、格差が広がり、生きがいの喪失を経験し、「絶望」への階段を下りていくことになると懸念します。

日本の政治も米国と同じような社会構造の軋轢の中で問題を抱え、弱者に光の当たり方が少なくなると、問題が出てきていると感じます。このまま人との共同感覚が無くなる方向へ進むと、「病い」を改善する見込みが難しくなり、米国と同様に絶望の自殺者が増えるのではないかと心配です。

とても極端な物言いですが、かつてキルケゴールは「絶望とは神を見失った(死んだ)状態のことを言う」とい、自身、神の存在に苦しみ悩みました。どんなにか神の救いを求めたことでしょう。

また実在主義のニーチェは「神は死んだ」という、有名な言葉を残しました。

キリスト教の欧米社会は、これまで争いの歴史であり、血肉とともに侵略の歴史でした。征服者の専制政治が続いてきたのです。

一方日本に於いては、古くは八百万の神國であり、仏教が渡来して融合し、そこには自然とともに「共生社会」がありました。「あなたの中の仏」が強調され、「自分の中の仏」と互いを敬い合い、感謝の心が大切と今も説かれます。このことが最も重要な点です。つまり仏の世界を確認(自覚)するのです。

それがいま米国のように格差が広がり、閉塞感が蔓延し、自身の喪失感も増大しているように見えます。これは仏の教えを相手や自分への自覚と理解が足りていないことでしょう。

伝統と文化や宗教は、目で見たり語つたり理解することは難しい部分ですが、身の回りの些細なところに意外と数多く当たり前にあり、それが「ありがとう」と思えるものです。

そのことに気がついた時、日本ていいなと思うのです。

1月例行事案内	
◎八 日 午後二時	薬師如来祈禱会 観音經読誦
◎十一日 午後二時	智泉院法要日(於・日本橋茅場町)
◎十八日 午後二時	観音經読誦法要(於・神木觀音堂)
◎二十八日 午後二時	不動明王護摩供修行
□祝・七五三お詣り (予約受付中)	*御札・御守り授与します
*毎朝 六時より公開で朝のお勤めをしております *都合のよろしい時にはご一緒にどうぞ	
どなたさまでも ご参詣下さい (マスクはご着用下さい)	

10/16(土) 月例
「止観(坐禅)会」9:30-10:30
「法華經を読む会」11:00-12:00



あとがき



・窓際も長く座れば俺の城

ぼやき川柳より

客が減りお化け屋敷も足が出る

合掌